

---

—— 港都横浜の意気を示す ——

横浜市開港記念会館（旧開港記念横浜会館）の装飾壁画について（2）

手塚恵美子\*

4. 開港記念横浜会館の開館式

1917（大正6）年7月1日、開港記念横浜会館はついに開館式を迎えた。1909（明治42）年の開港50周年記念事業の一環として計画が始まってから8年余り、1914（大正3）年9月の起工から3年近くを経て完成された堂々たるモニュメントの誕生に、横浜の街は沸き返った。のちに「ジャック」の愛称で呼ばれることになる高塔の四隅フラッグポールには日章旗と横浜市旗が飾られ、「開港記念建築として恥じざる剛健の気、商工の栄進を象徴せる」<sup>1)</sup>と謳われた横浜会館〔fig. 20〕は、1,200名を超える開館式参列者を迎え入れた。市民の声に建築計画の端を発し、36万9千余円にのぼった建設費が、横浜の商工業者を中心に、外国人を含む市民の寄付で賄われたことから、開港記念横浜会館は「市民発祥の祝福を具象化したる」<sup>2)</sup>記念建造物として、横浜市民の大きな誇りとなるものだった。式典会場となった館内の公会堂〔fig. 21〕は、1・2階吹き抜けの大空間の階下フロアと階上栈敷に1200名を収容するベンチ状の客席を擁し、来賓400余名・建設費寄付者600余名と関係者らによって、「立錫の席」もないまでに埋め尽くされた。1時50分に市長・安藤謙介（1854-1924）が開会を告げ、君が代が奏楽された後、建築主任技師・山田七五郎（1971-1945）による会館建築報告、安藤市長式辞、寺内正毅首相祝辞代読に続いて、侯爵・大隈重信（1838-1922）、公爵・徳川家達（1863-1940）、神奈川県知事・有吉忠一（1873-1947）が祝辞演説を行った。とりわけ大隈の祝辞には、横浜への特別な思いが込められていたのだが、その内容については、後にあらためて触れたいと思う。次いで来賓6名より祝辞が述べられ、横浜市歌が奏されて、2時50分に式典が閉会した後も、余興の能、長唄、舞踊や、各室での茶菓饗応、貿易品展覧会などを楽しむ人々で、横浜会館は夕方まで賑わった。

その祝賀の群衆の中に、会館建設計画の初期から設計案の検討に協力し、設計コンペ審査員、装飾の顧問としても関わってきた塚本靖の姿があった。この日の彼の日記には、次のように記されている。

晴 午前十一時宅を出て横浜に赴く 横浜会館落成式臨席 式終り余興翁を見 茶菓の饗を受け 公園内の記念展覧会一覽 和田英作氏と電車 新橋に還り 同停車場楼上にて 冷茶を飲み 薄暮帰宅<sup>3)</sup>

塚本は式典終了後、公会堂で余興の祝賀能「翁」を鑑賞し、別室で茶菓のもてなしを受けると、横浜公園の運動倶楽部で行われていた記念行事『横浜史料展覧会』にも足を運んだ。

開館式には、塚本とともに、開港記念横浜会館を飾った壁画・天井画の揮毫者である和田英作も出席していた。二人が連れ立って横浜から新橋へ戻り、駅舎で冷茶を飲みながら夕暮れ近くまで語り合った時、会館建設にまつわる塚本の思い出話や、和田の壁画・天井画制作についての苦労話なども、二人の話題にのぼったのだろうか。そっけない塚本の日記の記述には、和田の壁画・天井画のことは触れられていない。

横浜会館の1階から階上へと向かう人々を、和田英作、有田四郎、安藤東一郎によって揮毫され、張り上げられたばかりの階段室壁画と2階広間の天井画〔前稿(1) fig. 11・16 参照〕が迎えたはずだが、華やかな祝賀の興奮と歓喜の中で、どれほどの人々がこれらの建築装飾に眼を向け、その意義に思いを馳せたのだろうか。設置後の壁画・天井画に関する客観的な評価や感想を示す資料は、今のところ見つかっていない。

## 5. 記録の中の壁画・天井画 (1917年)

### i) 壁画・天井画に関する写真資料

開港記念横浜会館の壁画・天井画の制作過程については、前稿(1)<sup>4)</sup>で資料と考察を示した。壁画は予定通りとすれば横浜会館の開館より約1ヶ月前の5月末頃、天井画は開館直前の6月下旬に完成し、6月26日付『横浜貿易新報』では、壁画・天井画が会館へ搬入され設置中であると報じられた。階段室に向かい合うように設置された2面の壁画のうち、「開港以前の横浜村」を描いた左側壁面の壁画は、設置後の写真が残されており〔前稿(1) fig. 11〕、現在関心をお持ちの方々の間では比較的良く知られている<sup>5)</sup>。しかし、もう一方の右側壁面の壁画と2階広間の天井画については、写真資料がほとんど残されていない。そのためあって、実際それらが完成し、壁や天井に設置されていたのかと疑問視する方もおられて、筆者は幾度か質問を受けたこともある。「本当に壁画・天井画はあったのか」と。だが、限られた僅かな資料の中に、確かに壁画・天井画は存在していたことが記録されている。

壁画「開港以前の横浜村」を含む写真〔前稿(1) fig. 11〕が掲載された『開港記念横浜会館図譜』(以下、適宜『図譜』と略称)は、建設を請け負った合資会社清水組横浜支店によって編まれ、開館の約4ヶ月後に発刊された記念写真集である〔fig. 19-24〕。そこには、かつて建設地に建っていた旧町会所(1906年12月4日焼失)から、横浜会館建設工事の過程、竣工した会館内外を撮影した写真の数々に加えて、建築の平面図や工事説明書も収められ、貴重な記録となっている。

同書に収録された写真の中に、階段室右側壁面を飾ったはずの壁画、2階広間天井画全体の写真を見ることができないのは残念だが、2階広間を写した2点の写真「二階広間〈其一〉」〔fig. 23〕、「二階広間〈其二〉」<sup>6)</sup>には、ほんの一部ではあるが、天井画が写っているのを確認できる。

前稿(1)では、天井画完成記念と考えられる写真の複写資料を紹介した〔前稿(1) fig. 16、次々頁に部分図〕。同資料のうち、制作チームの和田英作、有田四郎、安藤東一郎らの背後に立て掛けられた天井画カンヴァスの一部を拡大した図〔fig. 25〕と、『図譜』所収の2階広間の写真〔fig. 23〕にわずかに写っている天井画を拡大した図〔fig. 26〕を比べてみると、天井画円周を取り囲む欄干部分の図様の一致が認められる。



『開港記念横浜会館図譜』清水組横浜支店、1917（大正6）年11月3日発行、横浜市中心図書館所蔵

\* fig. 20-24 の写真キャプションは同書「目次」記載の通り、  
（ ）内は掲載頁。

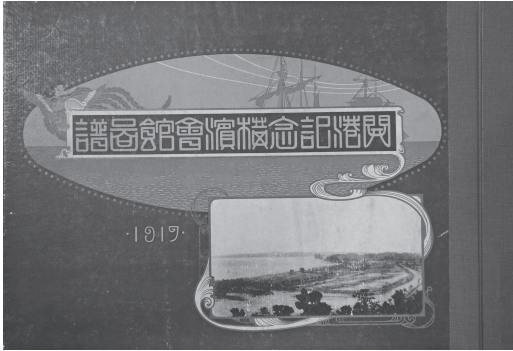


fig. 19 表紙  
右下枠内の写真は、壁画「開港以前の横浜村」



fig. 20 旭町通外観（p. 10）



fig. 21 公会堂（p. 19）



fig. 22 一階広間及階段室（p. 20）



fig. 23 二階広間「其一」（p. 22）



fig. 24 二階貴賓階段室（p. 28）



前稿 (1) fig. 16 (部分)

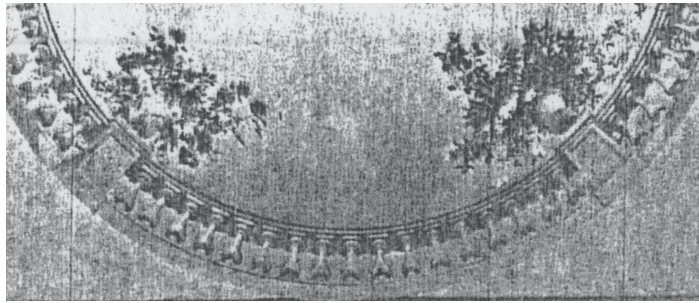


fig. 25 左図の天井画カンヴァス上部を180°回転させた拡大図

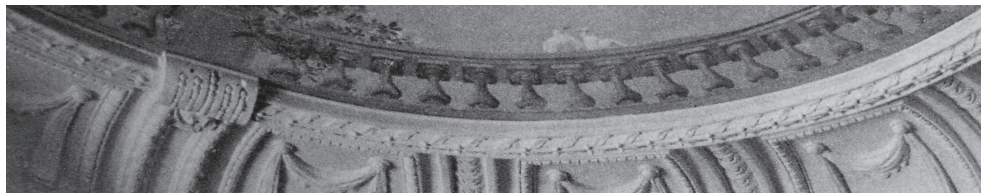


fig. 26 開港記念横浜会館2階広間の写真 [fig. 23] 天井画部分拡大図



fig. 25 欄干部分拡大図

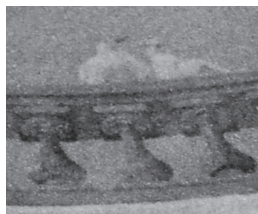


fig. 26 欄干部分拡大図

設置後の天井画 [fig. 26] では欄干の手摺子（バラスト）のプロポーションが、正面から捉えた天井画 [fig. 25] よりも短く見えるが、それは下から見上げる絵画は短縮されて見えるという視覚的特性のためである。両図の欄干部分から一部を抜き出し、さらに拡大してみると、

方形と円形を組み合わせた頭部から首が細く引き締まり下部がフラスコ状にふくらんだ手摺子の形状などが共通しているのを確認できる [上図 fig. 25・26 欄干部分拡大図参照]。

2階広間の天井は、白漆喰で塗装された正方形の折り上げ部分の内縁に、円形の漆喰彫刻を組み合わせて、天井画を取り囲む枠が形づけられていた。手の込んだ見事な職人技を見せる漆喰装飾から連続するように、天井画の中には大理石風の欄干が描かれ、その支柱上に置かれた鉢植えの植物の枝と並んで、二羽の白鳩が羽を休めているのが見える。手摺の向こうには、画面に広がっていたはずの空の一部がのぞいている。このように、実際の建物に付随する建築装飾から、天井画の中の架空の建築要素へと連続性を持たせ、建築の天井にあたかも穴が穿たれ空へと続いているかのようなイリュージョニズムを演出するのは、西洋建築の装飾天井画ではよく見られた手法である。近代の日本においても、例えば東宮御所（現迎賓館赤坂離宮、1909年竣工）に同様の天井画が適用され、現存しているのを見ることが出来る。

和田は横浜会館の天井画の構想について、「平和と言ふ意味で花の咲き乱れた所に、鳩などを配らつた絵」を描く予定であり、「装飾的の調子を極く弱くし」、「上から壓へ付けるやうな感じを失くなす積りである」と述べていた<sup>7)</sup>。完成した天井画もその通りのモチーフを配し、穏やかで軽やかな装飾となっていたであろうことが写真から想像される。



階段室右壁の壁画については、『図譜』のみならず、ほかの資料でも設置後の写真を確認することはできない。しかし、前稿（1）に既述の通り、開館式前日の『横浜貿易新報』には、横浜会館と2面の壁画をメイン・モチーフとする3枚一組の記念絵葉書の発行が報じられ、そこに壁画の図様を見ることができる<sup>8)</sup>。同絵葉書は、開館式当日の来賓一千名へ進呈するために用意されたほか、印刷を請け負った上田写真版合資会社によって一般向けに増刷されて、会館ならびに横浜公園内で3枚一組15銭で販売された。同社は、これとは別に会館高塔（のちのジャックの塔）から撮影した「全市一周パノラマ写真」を連続16枚組のコロタイプ版印刷絵葉書に仕立てて、一組25銭で売り出した。横浜公園内の記念絵葉書売店は、大変な人だかりで、「色刷り図案の方」つまり3枚一組の横浜会館・壁画絵葉書が飛ぶよう売れて行き、買い手の9割ほどが学生や若者であったという<sup>9)</sup>。

多くの人々が手にしたはずでありながら、今となっては目にする機会も稀であるが、現在、横浜都市発展記念館（横浜市中区）には、これら3枚一組の絵葉書が所蔵されている。筆者は同館のご厚意で、絵葉書を調査させていただき、画像をご提供いただいた〔fig. 27・28・29〕。それぞれメイン・モチーフの下に「横浜会館」、「開港当時ノ横浜」、「現今ノ横浜」と小さな赤字で記され、いずれもエンボスと美しい色刷りが施された美しい仕上がりを見せている。

絵葉書〔開港記念横浜会館 開館記念〕3葉、横浜都市発展記念館所蔵



fig. 27 「横浜会館」

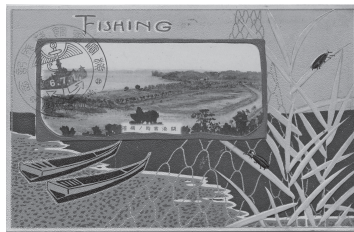


fig. 28 「開港当時ノ横浜」

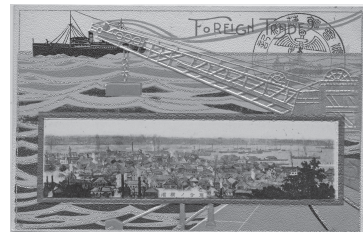


fig. 29 「現今ノ横浜」

「横浜会館」〔fig. 27〕は、真中に開港記念横浜会館を本町通・旭町通の交差点から臨んだイラストを置き、上部には層状に重ねた浜千鳥、ボーダー、青海波文様に、開港記念日および横浜会館開館日の7月1日を表す「1ST JULY」のアーチ状のレタリング、2輪の撫子を組み合わせ、下部左右には横浜市徽章が描かれている。1909（明治42）年の開港50周年記念行事の一環として公募され、制定された横浜の徽章は、カタカナの「ハ・マ」の文字を組み合わせでデザイン化したアイデアが卓抜で、「浜菱」「ハママーク」として、現在に至るまで変わることなく横浜市民に親しまれている。

「開港当時ノ横浜」〔fig. 28〕は、上部長方形の枠内に横浜会館階段室左壁の壁画のモノクローム写真を印刷し、上部に「FISHING」のレタリング、背景には風光明媚な漁村として知られた横浜村にちなんだ海、砂浜に並ぶ二艘の小舟、網干、笹に蛸があしらわれている。

「現今ノ横浜」〔fig. 29〕には、下部を占める長方形枠内に、階段室右壁の壁画のモノクロ

ーム写真を置き、上部に‘FOREIGN TRADE’のレタリング、背景には国際貿易港らしく、さざ波が立つ海洋の水平線上に大型貨物船が黒い船影を見せ、手前の埠頭からは荷を吊る大型クレーンのアームがのびている。

また、どの絵葉書にも、青い円形スタンプが押されており、そのデザインは横浜会館のシルエットに開館式年月日を表す「6.7.1」の数字と錨・翼などが組み合わされ、「横浜市」「開港記念」「横浜会館」の文字が取り巻くというものだった。

このように、記念絵葉書には3葉それぞれに横浜会館落成を記念し、海辺の寒村から国際的港湾都市に成長した横浜ゆかりのモチーフが盛り込まれた。特に今昔の横浜を表す2葉の絵葉書 [fig. 28・29] は、静かに風いだ海と活動的な波立つ海、手漕ぎの小舟と煙をたなびかせる大型貨物船、砂州と埠頭、浜辺の漁網のしなやかな網目模様と鋼鉄クレーン・アームの幾何学的形体が呼応し、新旧の横浜が対比的に表現されたデザインが眼に楽しい。のみならず、絵葉書の主役である壁画の図様の対比を装飾的に引き立て、壁画が何を言わんとするものなのかを補強する効果を上げている。同じ上田写真版合資会社が製作した『開港記念横浜会館図譜』の表紙と同様、図案家が誰であるのかについては記述がないが、いずれも手慣れたデザイン力と構成力を見せている。



fig. 30 絵葉書開連印刷物

また、これらに関連する資料をひとつ挙げておくと、後に横浜市開港記念会館が発行した冊子『横浜市開港記念会館』（1981年）には、左図 [fig. 30] が掲載されている<sup>10)</sup>。絵葉書に付属していた覆い紙のようなものなのだろうか、左側に「横浜会館新築記念」と題字が枠取りされ、中央上部には「此記念絵葉書の写真中／現時の横濱／開港当時の横濱／は共に斯道の大家和田英作氏／の作画を複製せるものなり」とあり、左下に「横浜市」の文字、右下に横浜市徽章のハママークが置かれている。「和田英作氏の作画を複製」と書かれた「複製」の意味が、壁画を写真製版によって複製したものと捉えて良い

のかどうかについては、少々検討を要する。というのも、絵葉書「開港当時ノ横浜」 [fig. 28] の枠取りされた壁画のモノクローム写真部分 [fig. 31] と、『開港記念横浜会館図譜』所収の階段室写真〔前稿 (1) fig. 11、次頁の部分図参照〕の中の壁画を拡大した図 [fig. 33] を比較してみると、図様が一致していないのである。幅が異なって見えるのは、本画 [fig. 33] が壁面に沿って折り曲げるように張られたためだが、明らかに画面手前の木々の形状が異なり、画面中央から右手に延びる太田屋新田の沼地は、設置後の壁画 [fig. 33] では開港場整備のための埋立てが進んだ状態を示すかのように、地形が四角く張り出して描かれている。左下の洲の突端の形状も合わない。この不一致の理由は不明だが、[fig. 31] は壁画本画の前後に縮図などとして制作された「複製」だったのだろうか。今となっては分からないが、現在の横浜市開港記念会館に縮小再現されて現存している壁画〔前稿 (1) fig. 9〕に見る太田屋新田の形状は、[fig. 31] に近いものとなっている。

一致していないと言えば、壁画制作過程では「開港以前の横浜村」と呼ばれていたタイトルが、完成時の絵葉書では「開港当時ノ横浜」とされている。しかし後述するように、完成

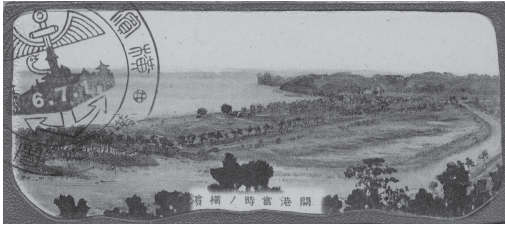


fig. 31 記念絵葉書「開港当時ノ横浜」[fig. 28]  
壁画部分拡大図

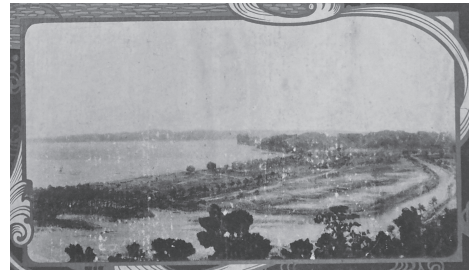


fig. 32 「開港記念横浜会館図譜」表紙[fig. 19]  
右下囲み枠 壁画部分拡大図



前稿 (1) fig. 11 (部分)  
「開港記念横浜会館図譜」所収「二階広間及階段室」  
写真の一部



fig. 33 左図[fig. 11]階段室左側壁面の壁画  
「開港以前の横浜村」拡大図



fig. 34 記念絵葉書「現今ノ横浜」[fig. 29] 下部囲み枠 壁画部分拡大図

作に関する記録では、やはり「開港以前の横浜村の真景」とされているため、本稿では「開港以前の横浜村」を仮のタイトルとして論を進めてゆくことにする。一方、「現今ノ横浜」の絵葉書写真も同様に、設置後の壁画と異なる部分があった可能性はあるが、今のところ階段室右壁の壁画に結びつく唯一の写真資料となっている。こちらの壁画完成作についても、後に取り上げる記録に、「大正六年三月現在の横浜市実景」、あるいは横浜会館が竣工した大正6(1917)年時点での「現在横浜市の実景」であることが明記されており、本稿では仮に「大正6年の横浜市」をタイトルとして論考を進めてゆく。



ところで、『開港記念横浜会館図譜』の表紙 [fig. 19] のうち、右下の枠取り部分に見られる写真 [fig. 32] に注目してみると、絵葉書の壁画写真 [fig. 31] と同じ図様であることに気付く。『図譜』には何ら表紙に関する説明はないのだが、横浜開港を象徴するイメージとして、壁画の写真に古色をつけて、横浜の古写真風に表紙画デザインの一部に用いたものと考えられる。空を高くして縦を長く取り、縦横比を調整しているのも、一枚の写真に見立てた演出なのではないだろうか。絵葉書の壁画写真 [fig. 31] は、下部が題字や丸味を帯びた枠取りで隠れている部分があり、『図譜』表紙の壁画写真 [fig. 32] と合わせ見ると、把握できる画像の幅が広がる。

## ii) 壁画「開港以前の横浜村」の制作参考資料

「開港以前の横浜村」[fig. 33] については、開港当時あるいはそれ以前の写真をもとに壁画が描かれた可能性も考えてみたが、横浜を写した現存最古の写真は、P. J. ロシエが1859（安政6）年6月頃に撮影した横浜村と野毛の風景写真2点とされる<sup>11)</sup>。このうち横浜村を捉えた1枚は、壁画とは風景が異なるし、そのほかに壁画と同じような構図の写真は知られていない。何よりも、前稿（1）で引用したように、1917（大正6）年3月7日付『横浜貿易新報』では、壁画「開港以前の横浜村」の実質的な制作担当者であった安藤東一郎は、十分な参考資料がないため、神奈川・紅葉坂・掃部山からの写生と、昔の絵図・地図をもとに半ば想像で壁画の下図を作り上げたと言われている。その後の本画制作には、横浜の古老・田澤武兵衛が記憶を頼りに描いた開港以前の図面をも参考にすることになった<sup>12)</sup>。このほか、安藤は「五姓田芳柳氏が描いた明治六年頃の横浜の水彩スケッチ」も制作現場で手元に置いていたという<sup>13)</sup>。現在、神奈川県立歴史博物館（横浜市中区）には、初代五姓田芳柳（1827-1892）の次男で洋画家の五姓田義松（1855-1915）が旧蔵していた作品群が所蔵されている。その中には「明治六年」の年記を持つ、横浜から神奈川を遠望した水彩画も含まれている。横浜開港期から明治期にかけて活躍した五姓田芳柳を始祖とする五姓田派の工房は、1873（明治6）年末から翌年に浅草へ移るまで横浜に置かれ、五姓田派の画家たちは、横浜近在の土地や海辺を練習のために描いていたと考えられている<sup>14)</sup>。そうした作品のうち一枚が、壁画の参考資料としても使われた可能性がある。

安藤が参照したと報じられた「昔の絵図や地図」について付言しておく、具体的な資料名などは分からないながら、周囲の協力により、様々な資料が集められていた可能性は考えられる。開港50周年の節目となった1909（明治42）年の開港記念日近くには、横浜商業会議所主催による『横浜開港記念史料展覧会』が催され、出品点数800余点の中には、「開港当時の図画、油絵等珍しきもの少なからず」と報じられた<sup>15)</sup>。残された同展の列品目録を見ると、その時点でいかに多くの資料が集められたかに驚かされる<sup>16)</sup>。その後、出品者に交渉の上、開港史料の模写をつくる試みがなされた<sup>17)</sup>。そして、1917（大正6）年にも、開港記念横浜会館の開館式に合わせて、関連企画の目玉のひとつとして、横浜公園内の運動倶楽部で『横浜史料展覧会』が開かれている<sup>18)</sup>。本稿冒頭で塚本靖が足を運んだと書いたのは、この展覧会のことであり、運動倶楽部は、その少し前まで壁画・天井画制作のアトリエとして使われていた場所でもあった。展覧会には壁画の参考となった資料も展示されていたのだろうか、今となっては分からないが、興味をそそられる。

### iii) 壁画・天井画に関する文字資料

では、壁画・天井画には何が描かれたのか。その内容を示す文字資料を、以下に紹介してゆきたい。

先述の3月7日付『横浜貿易新報』記事は、その前日に壁画制作チームの和田英作、有田四郎、安藤東一郎が、横浜市役所議長室に於いて、横浜会館建設委員に下図を披露し、壁画の構図について説明を行った様子を報じるものだった。記事中、制作過程に関する報道部分は、前稿（1）に引用し検討した<sup>19)</sup>。あらためて同記事から、壁画下図に描かれた内容に関する箇所を下記に引用し、これを【資料1】として、後の考察で再び取り上げることにしたい。

#### 【資料1】『横浜貿易新報』1917（大正6）年3月7日、第7面掲載記事

—横浜開港記念会館を飾る今昔二面の壁画／茅舎<sup>ぼうしや</sup>横浜村の曙光<sup>いんせい</sup>と殷盛<sup>こうよう</sup>横浜港の紅陽—  
 […]「現今」の方は春の閑寂な夕暮を現はさうとしたものださうで 赤々と照る夕日を半面に受けた記念会館の高塔が左端に厳めしく聳え、それに続いて黒く陰つた県庁の時計台、金色に光る税関の円蓋<sup>ドーム</sup> 新港の大起重機<sup>だいクレーン</sup>などが煤煙に包まれた空の中に浮いて居る、如何にも暢りとした港内の水面には 新築の栈橋<sup>のんび</sup>が突出した附近に白い腹や黒い煙筒の各会社の汽船が各々其特長<sup>つぎだ</sup>を見せて浮標に繫留されてある、僅五尺に足りぬ此カンバスの上に繁雑な町の色と緩つたりとした春の気分とが十分に表はれて居た 「開港以前」の方は空気の澄徹した春の朝を描いたもので冷や／＼するやうな朝の空気が画面全体に漲り、澄んだ空に浮いてる雲はより一層、淋しかつた横浜村当時の印象を深からしめる、図の中央には黄色い洲<sup>づみ</sup>が突出して其突端に弁天の杜が肌寒さうに小さく固まつて居るのが見える、遥の海面には白帆が一二点動いて居る […]

上記の壁画下図は「スケッチ風の油絵」であったというのが、壁画完成作に描かれた内容を詳述している資料が見当たらないため、この下図に関する報道は、壁画本画の参考資料としても留意すべきものだろう。事実、先述の「記念絵葉書」[fig. 28・29]に印刷された壁画[fig. 31・34]、およびこれらの壁画焼失後に、縮小再現され現存している現横浜市開港記念会館の壁画「開港前の横浜村」「大正期の横浜港」[前稿（1）fig. 7・8・9・10]の描画内容とも通ずる部分が多く、新旧壁画の図様と意味の理解を助けてくれる。

設置後の壁画については、7月1日付『横浜貿易新報』に掲載された「記念会館縦覧案内」<sup>20)</sup>の中に短く触れられている。開館式翌日の7月2日から3日間、開港記念横浜会館は一般公衆にも開放された。それに先立ち、館内縦覧の順路を事細かに案内する記事の中に、次のような一節がある。

[…] 大玄関広間を通りて、本町通り側の階段を正面に上り右に折れて、更に右に上れば、新館二階となるべし、此階段上の第一階<sup>たつ</sup>に立て背後を顧みる所に、左に漁村の横浜右に現代興隆の横浜なる和田英作画伯の筆に成る壁画を発見すべし

階段を上り切った一番上のきざはしに立って振り向くと、左手壁に開港以前の「漁村の横

浜」、右手壁に「現在興隆の横浜」を発見したと、この記事の記者は書いている。壁画を見ての感想までは記されていないが、開館式までに2面の壁画は確かに張り上げられていたことを示す客観的証言と言える。

また、1917（大正6）年発行の『建築雑誌』第367・369号と『開港記念横浜会館図譜』には、横浜会館の構造・意匠・装飾など建築概要の説明が掲載されており、その中で壁画・天井画のテーマ・意図・サイズについても言及されている<sup>21)</sup>。まず『建築雑誌』第367号の関連箇所を、【資料2】として、以下に引用する。

【資料2】「開港記念横浜会館」『建築雑誌』第367号、1917（大正6）年7月、p.81（583）

二階広間及階段室　此階段左右は壁には横浜今昔二様の大壁画あり　一は安政初年開港以前の横浜村の真景にして　一は大正六年三月現在の横浜市実景なり　中央丸天井には平和の意を寓せる油絵あり　何れも画伯和田英作氏の筆に成れり

簡潔な記述ながら、ここでは「開港以前の横浜村」を描いた壁画の時代設定が「安政初年」つまり安政年間（1854-1860年）の始まりの年もしくは初めの頃、「現在の横浜市実景」の方は制作を実質的に担当した有田四郎が、山手のフェリス女学校楼上から横浜市街を写生しつつ下図を練り上げた時期に当たる「大正六年三月」とされている点、具体的である<sup>22)</sup>。

『建築雑誌』第369号と『開港記念横浜会館図譜』の壁画・天井画関連箇所は、ほぼ同文である。以下に【資料3】として、『図譜』掲載の関連箇所を引用する。

【資料3】「開港記念横浜会館建築工事説明書」『開港記念横浜会館図譜』清水組横浜支店、1917（大正6）年11月

二階広間　〔…〕此階段左右壁に今昔二様の大壁画あり、一は開港以前横浜村の真景幅五尺七寸長十三尺七寸、一は現在横浜市の実景にして幅五尺七寸長二十一尺三寸五分とす　之の壁画の意匠に就ては頗る周到なる注意を払ひたる所にして　横浜開港記念の真意義を明確に表顕する必要上　過去現在二様の横浜港の実景を捉へて画題とし　観者をして直に旧時の荒寥たる漁村と現時の隆盛繁栄とを対比し　其変遷の急速なると人力の偉大なるとを識らしむる事を目的としたり　何れも和田英作氏の筆になる  
中央円天井も同氏の筆に成れる平和を意味したる油画あり　紫雲霞くあたり各種薔薇紅白娟を競ひ白鳩空に舞ふの状を画きたる者なり

この「工事説明書」の「附記」に、執筆者は横浜会館の設計監督主任・山田七五郎と記されている。彼は『建築雑誌』の発行母体である建築学会の正員でもあり、のちに横浜市臨時建築課（1920年発足、1922年より建築課）の初代課長となった。【資料2】の『建築雑誌』記事も、内容の発信元は山田らであったと考えられ、【資料3】とともに、横浜会館建設者サイドによる壁画・天井画のコンセプトの表明として読むことができるだろう。

壁画のサイズは、【資料3】の尺貫法による表記をメートル法に換算すると、「開港以前の

横浜村」が縦約173×横415cm、「大正6年の横浜市」が縦約173×横647cmであった。「開港以前」の横幅の方が「大正6年」より短い、それは階段室左壁手前の壁面に船舶の丸窓をデザイン化したような円形の飾り縁が置かれ〔fig.33の左図、前稿（1）fig.11部分図を参照〕、壁画設置に使える壁面の幅が左右で異なっていたためだろう。あるいは画題の点で「開港以前」の寒村の横浜を小さい画面に描き、それより大きめの画面に繁栄する「大正6年」の横浜を表して、サイズの対比で隆盛の変遷を強調する意図があったのかもしれない。それまでに和田英作が手掛けてきた数々の大規模な壁画・天井画<sup>23)</sup>と比べればサイズは控え目だが、それでも大画面カンヴァスに描かれた油彩の「大壁画」と称するに値する規模として構想されたと言える。

次に、以上の【資料1・2・3】も再び取り上げ検討しながら、壁画・天井画の意義を考察してゆきたい。

## 6. 港都横浜の「勇健」の意気を示す一開港記念横浜会館の壁画（1917年）の意義

### i) 建築装飾としての壁画・天井画の意味

開港記念横浜会館の壁画・天井画の意義の考察に入る前に、まず近代の日本における建築装飾としての壁画・天井画導入の意味について述べておきたい。

それまでにもたびたび個人邸宅や公共建築物の壁画・天井画を手掛けていた和田は、大正3（1914）年には中央停車場（現東京駅）皇室専用入口中央大ホールの壁画を、東京美術学校西洋画科卒業生の田中良（1884-1974）、五味清吉（1886-1954）とともに完成させた<sup>24)</sup>。その制作監督をつとめたのは、東京美術学校西洋画科教授で和田の師である黒田清輝（1866-1924）であったが、彼は中央停車場が竣工した後の談話の中で、建築物と壁画の関係について自論を語った<sup>25)</sup>。黒田は「一般の人々は壁画といふと贅沢物視し、又は遠い昔の風習のやうにのみ思ふて居やうが、決してそんな範囲の狭いものではなく、建築物ある以上、それに相当な装飾の必らず施こさる可き事は、昔も今も変ることではない」と述べた。そして、洋服を着るのにシャツやカラーやネクタイが必要なように、近代の日本に移入された洋風建築にも「建築相応の装飾が必要」であり、壁画によって「建築の威厳も添へば、快感も起る。実に建築物に壁画又は天井画はなくてはならないものである」と主張した。

まさに開港記念横浜会館の壁画・天井画も、横浜にとって重要な記念建造物であるだけでなく、全国に先駆けた洋風の本格的公会堂建築に相応しい装飾を、完璧なものとするための重要な要素として構想されたと言えるだろう。壁画・天井画は、横浜会館を訪れる人々の眼を楽しませて「快感」を醸し出す機能を持つだけでなく、ほかの華麗な装飾の数々と同様、建築に「威厳」を添えて格の高さを象徴する要素としても重要であった。

和田英作も横浜会館の壁画を委嘱される以前に、壁面装飾に関する記事の中で、「世の中には兎角美術的と云ふ事を以て実用から離れた贅沢な事のやうに考へている人があるが、それは誤つた考へである。美術的と云ふ事は、何も徒に装飾を施す意味ではない。無くてはならぬものがよく調和を保たれて居ると云ふのが真に美術的なのである」と述べていた<sup>26)</sup>。この「調和」は、和田が壁画・天井画を手掛ける際に最も心を砕いた点であった。黒田も和田も壁画制作に関しては、敬愛するフランスの大家ピュヴィ・ド・シャヴァンヌ（1824-1898）



に多くを学び、建築と見事な調和を見せるシャヴァンヌの壁画装飾を賞賛して止まなかった。それらの中でも、和田は特にパリのソルボンヌ大学大講堂壁画（1886-1889年）を高く評価し、そのほかリヨン美術館階段室壁画（1883-1886年）、パリのパンテオン壁画（1874-1878／1893-1898）を「決して忘れることの出来ぬものである」と語っていた。

リヨン美術館の階段室壁画 [fig. 35・36] は、3階建ての建物各階をつなぐ吹き抜けの階段室上部、3階部分を取り囲む四方の壁面に4点の壁画を巡らせた大装飾で、中でも美術館の意義の象徴にも通じる《諸芸術とミューズたちの集う聖なる森》[fig. 36] は、近代日本の洋画家たちに深い感銘を与えて賞賛された。このほかにも、シャヴァンヌの壁画は、アミアンのピカルディ美術館、ルーアン美術館、アメリカのボストン公共図書館などの階段室も飾った [fig. 37-40]。

足もとの階段から、手摺・手摺子が形作る欄干、踊り場、それらを取り囲む壁・天井までもを含めた空間全体としての階段室（staircase）という概念は、日本では一般的に意識されることは少ないかもしれない。しかし、西洋の公共建築物や大邸宅における階段室は、しばしば建築のひとつの見せ場となる重要性を帯びた空間である。大規模な公共建築物であればなおのこと、非日常的な建築を訪れる高揚感を人々に与えると同時に、建物の格や権威を示す場所ともなり、それゆえ周到に装飾が施される。近世以前の日本家屋や城郭の階段といえは、「段梯子」という言葉があるように、傾斜のきつい梯子状の階段が思い浮かぶ。そこには、階下と階上をつなぐ昇降のための構造物という以上の意味が感じられることはまずない

#### ピュヴィ・ド・シャヴァンヌによる階段室壁画の作例



fig. 35 (左)・36 (右) リヨン美術館階段室壁画 (1883-1886年)  
fig. 36 中央は《諸芸術とミューズたちの集う聖なる森》(1884年)

fig. 37 アミアン・ピカルディ美術館  
階段室壁画 (写真左側 1863年、  
右側 (部分) 1880-1888年)



fig. 38 ルーアン美術館  
階段室 (踊り場) 壁画  
(1888-1890年)

fig. 39 (左) ボストン公共図書館階段室壁画 (1893-1895年)  
fig. 40 (右) 同階段室階上の壁画 (1893-1895年)



のだが、近代の日本に洋風建築が移入されるに至って、階段の概念は変わっていった。階段の幅は広く、傾斜は緩く、一段一段の高さは徐々に昇降しやすいものとなり、明治初期のいわゆる擬洋風建築の時代から、施工を請け負ってきた棟梁や職人たちは、持ち前の腕を競うように美しく装飾的な手摺・手摺子を造り上げていった。明治中期以降に日本人建築家たちが本格的な洋風建築を手掛けるようになると、彼らはしばしば西洋にならって階段室に凝った構成と意匠を導入した。

開港記念横浜会館では、1階正面入口近くの広間から2階広間に通じる階段室と、中庭側の1階から2階貴賓室へと導く貴賓階段室のいずれもが、特徴的な大窓の採光を生かした美しい空間となっている [fig. 22・24、fig. 33 左の前稿 (1) fig. 11 部分図を参照]。はじめて訪れる建築で階段を上るという行為は、多かれ少なかれ心躍る体験ではないだろうか。階下から階上へ一段一段近づくにつれて、階上の様子が徐々に視界に入り、上り切ると別な世界が目の前に開ける。横浜会館の場合は、1階正面入口近くの階段を上って階上で振り向くと、船窓を思わせる小さな円で装飾されたアーチ型大窓の両側に横浜の歴史を物語る壁画が見られ、2階広間に進んで視線を上に向けると空へと続くような天井画が迎えた。そして左手に見える控室との間仕切りには、ステンドグラスが燦然ときらめいていた [fig. 23]。さらに奥へ進んで貴賓室近くの階段室に足を運ぶと、目を奪うような大ステンドグラスが窓一面を覆っていた [fig. 24]。建築を訪れる目的や各室の用途からしばし自由な気持ちで誰もが通り抜けるそれらの共通空間は、建築のコンセプトと深く関わる装飾によって来館者を迎え、人々にこの記念建造物の意義の共有を促すものとして存在したのである。

## ii) 壁画の意図と意義

それでは、開港記念横浜会館の建築の意義とは、どのようなものであったのか。先述の『建築雑誌』第367号に掲載された工事概要は、会館の外観について「建築様式は最近復興式にして横浜開港記念たるの点に留意し専ら勇健を旨として商工業栄進の意気を示さんことに努めたり」と説明している<sup>27)</sup>。この外観は、何よりも「横浜開港記念」という建築の意義を表すために、「勇健」を主調として「商工業栄進の意気」を示すことを目指していた。日本における初期の建築設計競技の事例として知られる横浜会館の懸賞付き設計コンペで福田重義の設計案が選ばれた際も、「外観最善く本建築の性質を表現す」という点が理由のひとつとして挙げられた<sup>28)</sup>。ここで「最近復興式」すなわちネオ・ルネサンスと表明されている横浜会館の建築様式は、後にはいわゆる辰野式フリークラシックと呼ばれることになる。ネオ・ルネサンス様式の特徴であるアーチ型窓や、異なる複数の型の窓を整然と配置した壁面構成、調和的な比例による空間構成などの要素に、その他の古典的要素を自由に組み合わせ、赤煉瓦と花崗岩が織りなす紅白の華やかな外壁、高塔や大小ドームによって描かれる複雑なスカイライン、開口部のリズムカルな繰返しなどが相俟って、「勇健」な印象を喚起し「商工業栄進の意気」を表現するにふさわしい外観を形作っている。その建築の重要な装飾として企図された壁画・天井画も、建築の外観に表現された横浜の「勇健」と「商工業栄進の意気」に対応するものとして構想されたと考えられる。

というのも、先述の【資料3】では、壁画は建物外観と同様に、「横浜開港記念の真意義を明確に表顕する必要」が明言されている。そのため「壁画の意匠に就ては頗る周到なる注

意」が払われ、画題は「過去現在二様の横浜港の実景」に設定された。それは「旧時の荒寥たる漁村」と大正6年における「現時の隆盛繁栄」とを対比的に表し、見る者にその間の「変遷の急速なると人力の偉大なるとを識らしむる事」を目的とするものだった。

つまり壁画は、単に開港以前の横浜村と大正6年の横浜市の風景を示すものとして構想されたのではない。2つを対比することによって、わずか半世紀余りの間に、寒村から一大港湾都市・商工業都市へと急速な変貌を遂げた横浜の発展と、その繁栄を達成してきた横浜の人々の力の偉大さを、視覚的に知らしめる機能を担っていた。描かれたのは風景だが、それは人間の物語であった。壁画に描かれた過去と現在の横浜の姿に目を向け、古くからの横浜市民の胸に刻まれた記憶が呼び起こされる時、あるいは若い世代が先人の業績に思いを馳せる時、一人一人の胸の中で、横浜の繁栄を支えてきた「人力の偉大なる」物語は繰返しつつ直される。2面の壁画、「開港以前の横浜村」と「大正6年の横浜市」の「間」をつなぐのは、そこに立つ「人」であり、人があってはじめてひとつにつながる横浜の歴史の物語こそが重要であった。換言するなら、人が壁画の前に立つとき、半世紀余りの間に繁栄を達成してきた横浜市民の「勇健」な気概、「商工業発展の意気」に感ずることが、壁画の意図であった。その港都横浜の繁栄への道のりの画期となったのが横浜開港であり、それを記念する建築と壁画は、ともに横浜市民の偉業への思いを繰返し喚起し、永遠に留める意義があったのである。

### iii) 壁画のテーマと図様～「朝」の横浜村と「黄昏」の横浜市

また、2面の壁画をつなぐ「間」には、別な側面もある。【資料1】の『横浜貿易新報』記事の見出しが、「今昔二面の壁画」の下図のテーマを「茅舎横浜村の曙光と殷盛横浜港の紅陽」と表現しているように、昔の茅葺きの家々が集まる横浜村は朝の光の中に、1917（大正6）年の繁栄を極めた横浜港は夕陽の中に描かれた。西洋美術における図像表現では、しばしば「朝」は人間で言う「幼年期」、「黄昏」は「壮年期」の比喻である。また、「誕生」と「円熟」の象徴でもある。西洋に学び、西洋画を修得した和田英作ら壁画制作陣の構想も、そうした一日の時にまつわる西洋美術の寓意を踏まえたものであっただろう。壁画に描かれた「朝」の光の中の横浜村は、発展が始まろうとしている「幼年期」、「黄昏」の紅陽に染まる横浜港は、発展を遂げて成熟した「壮年期」の横浜の比喻と読むことができる。そして、その両者の「間」の時の流れの中には、「昼」「青年期」に当たる、「勇健」で「商工業発展の意気」に満ちた成長期・発展期の横浜があったのである。

ペリー率いるアメリカ艦隊の来航まで、わずか100戸ほどの半漁半農の長閑な寒村だった横浜は、今まさに目覚めの時を知らせる曙光に包まれ、横に長い浜という名の通り、海辺にまどろむように長く横たわる姿で描かれた。【資料1】を参照すると、「開港以前の横浜村」の下図は、「空気の澄徹した春の朝を描いたもの」であった。画面には朝の冷涼な空気が漲り、澄んだ空には横浜村の淋しげな印象を強調するような浮雲、画面中央に黄色い砂州、その突端に弁天社の杜が描き込まれ、遙かな沖の海面には白い帆を上げた舟が動いていたという。壁画本画のモノクローム写真 [fig. 31・32・33] では色彩までは分からないが、下図の基本的構成は本画にも受け継がれ、そして現横浜市開港記念会館の壁画「開港前の横浜村」[前稿 (1) fig. 7・9] にも継承されている。今、現存している壁画の前に立つと、青味

がかった空気の調子と朝焼けに染まる空の浮雲から一見して朝の情景であろうことが看取され、資料と合わせ見ると一層合点がいく。

一方、1917（大正6）年の横浜港を描いた下図は「春の閑寂な夕暮」の情景として表され、市街には「赤々と照る夕日を半面に受けた記念会館の高塔」、「黒く陰つた県庁の時計台」、「金色に光る税関のドーム」が配された。その向こうには新港の大クレーンが煤煙にかすんで空に浮かぶように見え、新築された大栈橋付近には白い船体と黒い煙筒など、それぞれの特長を見せる各会社の汽船が繫留されていた。壁画本画のモノクローム写真 [fig. 34] からは、夕暮れの色彩までは伝わらないが、開港記念横浜会館、県庁舎、税関がおぼろげに霞んだように小さく描かれ、街を埋め尽くす建築群や煙突、湾内の汽船が細々と描き込まれている。現在の開港記念会館の壁画「大正期の横浜港」[前稿（1）fig. 8・10] では、縮小されたカンヴァスの規模の違いもあってか、建築群の構成は単純化され、全体の雰囲気はまとまりを持ったものとして感じられる。【資料1】の下図の説明にある「繁雑な町の色と緩つたりとした春の気分」は、現在の壁画にも受け継がれており、画面左方向から差す夕陽が建物の西側をオレンジ色に輝かせ、東側に影を落として、詩情を醸し出している。

#### iv) 「青年期」の横浜

こうした「朝」と「黄昏」の間をつなぐ時代の横浜は、どのような姿を見せていただろうか。横浜の「昼」もしくは成長著しい「青年期」は、開国後に開港場として急速に整備が進み、外国人居留地が設けられ、各国領事館やホテル、商館、教会など、洋風建築が次々に建てられていった時代である。外国人のために開発され、外国人貿易商を通じた輸出入貿易により賑わった、外国人を中心とする横浜とも言える時代であった。外国人居留地と隣り合う日本人居住区でも、開港記念横浜会館が建設される以前、その地にあった横浜町会所（1874年）[前稿（1）fig. 12] を設計したのは、アメリカ人建築家リチャード・P. ブリジェンスだった。施工を請け負ったのは、開港記念横浜会館を施工した清水組（のち清水建設）の創業二代目・清水喜助（二代）と言われる。「横浜の西洋館の祖」とも呼ばれるブリジェンスは、横浜イギリス領事館（1869年）や、横浜税関（1873年）、日本で初めて鉄道が居留地・築地と横浜を結んで開通した時に新橋駅・横浜駅の駅舎（1871年）も設計している。彼の活躍に見るように、開港後の横浜は、新しい技術や文明・文化をもたらした欧米人に学びながら、時に彼らの主導のもと、横浜の人々がその後の発展の礎を築いていった時代であった。

そのような新しい時代に、明治日本の近代化の先端をゆく横浜の街で、日本人たちはどのように感じていたのだろうか。本稿冒頭で述べた開港記念横浜会館の開館式が行われた際、祝辞演説を行った大隈重信の言葉には、この時代を回顧する深い感慨が込められていた<sup>29)</sup>。前年まで首相をつとめ、この年数えて80歳となった彼は、横浜の一大国際都市への道程を、長きにわたって見守ってきた。その間外交に携わり、明治日本の悲願であった欧米列強との不平等条約改正に力を尽した大隈は、開港当時の横浜で苦々しい思いを味わっていた。記憶の中の外国人居留地周辺は、「外国人跋扈して 治外法権を把持し 武士の帯刀を排除して 吾等の刀は凡て取上げられ 英仏の軍隊は厳めしく駐 筭して名を自国人保護に借りて専横を極め 邦人為めに萎縮して外国人の前には小さくなり居れり」という状況であったのである。しかし、日清・日露戦争の勝利と不平等条約改正、そして第一次世界大戦による好景

気を経た開港記念横浜会館落成の1917（大正6）年において、日本は「今や国家としては世界の一等国の列」に位置するようになり、外国人からも「尊敬の眼を以て見らるゝに至」っていた。その「国家的大発展の実を形成せる部分の多くを横浜市民たる諸君及諸君の祖先が貢献せし事実を思ひ 今又爰に之を記念すべき会館の開館式を挙るを惟へば 感慨誠に深し」と祝辞には熱が込められた。「青年期」の横浜の発展・成長と表裏にあった苦渋と困難を語り、横浜市民の国家的大発展への貢献をも讃えた大隈であったが、一方では当時の横浜の人々に対して、ある懸念も抱いていた。開館式に先立つその年の初めに、「横浜の回顧と其将来」について語った際、「第一代の横浜人士が潑刺たる元気を以て活躍した光景は、誠に心地好きものであつた」が、「初代の人々に見る如き勇健なる意気が、今日にも尚横浜人士の間に漲つて居る」だろうかと、大隈は疑問を呈していたのである<sup>30)</sup>。

大隈と同じような思いを抱く人々にとって、開港記念横浜会館の壁画は、「青年期」の横浜で活躍した第一世代の横浜市民の「勇健なる意気」の価値を問い直し、第二世代の人々に新たな意気を鼓舞する意義をも見出すことができるものであったと思われる。

#### v) ステンドグラスに込められた横浜開港の物語

このように考察してみると、横浜会館の壁画は、今昔の横浜の姿を記録として見せる歴史教科書の挿絵と同じようなものとして存在したわけではなく、開港以来の横浜の歴史と深く関わる人々の偉大な力を物語るメディアとして、そこに置かれたことが理解されるだろう。

壁画と連動するように、2階広間と控室の間仕切りを飾ったステンドグラス [fig. 23] にも、やはり横浜開港と深くつながる物語を読むことが出来る。この建築装飾の意図については、『開港記念横浜会館図譜』の「工事説明書」の中で、以下のように説明されている。1階中庭側から2階貴賓室方向へ通じる貴賓階段室の大ステンドグラス [fig. 24] の説明と併せて引用する<sup>31)</sup>。

控室 〔…〕 広間との間仕切には交通に関する意匠の「ステインドグラス」を嵌入せり 一は外国人籠に乗り巨大の体軀を容るの余地なく両脚長く垂れて地に接せんとするの状を画き、一は一葉の渡船に呉越の客を乗せ船夫の棹させる状を画きたるもの 何れも開港当時不完全なる交通の状を記念せんが為なり

貴賓階段室 〔…〕 之の室にも大窓あり 高十二尺五寸幅八尺あり 之れに開港の使命船にして米提督「ペルリー」の座せる「ホーハッタン」号が威風堂々浪を蹴つて入港するの状を「ステインドグラス」として嵌入せり

1854（嘉永7）年、マシュー・ペリー（1794-1858）率いるアメリカ艦隊が、前年に続いて来航し、江戸湾入港後はサスケハナ号からポーハタン号へ旗艦が移され、日本側との交渉が行われた。その後、横浜村において日米和親条約（神奈川条約）が締結され、ここに日本は「開国」する。次いで1858（安政5）年、横浜沖のポーハタン号船上で、アメリカと結んだ日米修好通商条約を皮切りに、イギリス、フランス、オランダ、ロシアと修好通商条約（安政五カ国条約）が締結され、神奈川はじめ5港の開港が取り決められた。貴賓階段室の



大ステンドグラス [fig. 24] に「開港の使命船」となったポーハタン号を、こうした歴史の記念として表すことの意味は、誰の眼にも明白で分かりやすい。

しかし、もう一方の2階広間と控室の間に置かれた2点のステンドグラスについて、その目的が「開港当時不完全なる交通の状を記念せんが為なり」とされていることの意味については、少々考察を要する。これは「開港当時不完全なる交通」の状況を単に「記録」したものではなく、「記念」なのである。そこに込められた横浜開港と深くつながる物語について考えてみると、まず各国との修好通商条約では開港場を神奈川としていたが、その具体的な地域は後に協議された。幕府側が交通の要所である神奈川宿近辺で外国人との摩擦や事件が起こるのを懸念し、横浜を主張したのに対して、アメリカの総領事タウンゼント・ハリス（1804-1878）とイギリスの総領事ラザフォード・オールコック（1809-1897）は、江戸へ続く東海道の宿場として交通の便が良く、神奈川湊を擁して物資の流通が盛んであった神奈川宿付近を強く要求した。その理由のひとつとして挙げられたのが、横浜の交通の便の悪さであった。まだ埋立てが進んでおらず、鉄道も整備されていなかった当時、神奈川宿方面から横浜を目指すには、東海道から迂回して野毛山を越え、山手方面から回り込むように徒歩か馬か駕籠で行くか、渡し船で海を渡るしかなかったからである。壁画「開港以前の横浜村」[fig. 31・32・33] は、東海道からの迂回の途上に位置した野毛の辺りに視点を取る俯瞰構図で描かれていると言えば分かりやすいだろうか。開港以前、人々は壁画下部の海から渡し船で漕ぎ着けるか、画面右側方面から迂回するように横浜村へ入ったのである。しかし、外国奉行は天然の港湾として優れた地勢と十分な沖合の水深を持つ横浜を開港場に推奨し、陸路を整備すれば、現在の「草莽そうもうの地」に「瓦屋立並び新道相通じ人煙打続」という繁華な都會が出現するであろうと予想した<sup>32)</sup>。ハリスは横浜を居留地とすることに強硬に反対し、外国側は領事館を次々と神奈川に構えたが、日本側は横浜居留地の整備を進め、外国人貿易商たちは続々と横浜にやってきて土地を借用し、居を構えた。のちに日本側の識見が妥当性以上の卓見であったことは、歴史が証明することとなった。こうした横浜開港時の経緯が、このステンドグラスには込められていると考えるべきであろう。

また、冒険心や開拓精神に富んだ外国人らは「籠に乗り巨大の体軀を容るの余地なく両脚長く垂れて地に接せんとする」不便さにも関わらず、横浜を訪れ、商館を築き、貿易の道を切り拓いていった。そして、開港場となった横浜には、貿易商人だけでなく、茶屋・飲食店・日用品店などを営む商人、町づくりのための大工・職人、遊興見物所で娯楽の見世物を提供する興業師・芸人など、様々な職業の日本人も横浜へやってきて、商工業と文化の発展を支えた。ユーモアを交えた外国人の駕籠での道行、「呉越の客」を乗せた一艘の渡し船には、そのような比喻も込められていたと読むことができるだろう。

現在の横浜市開港記念会館に復元されている2点のステンドグラス [前稿 (1) fig. 4] は、いつの頃からか一方は背景に見える富士山ゆえか「箱根越え」と呼ばれるようになり、もう一方は「呉越同舟」と呼ばれている。近年の解説等を参照すると、両者の意味については、先述の「工事説明書」などの記述と同様、「開港当時の交通に関するもの」「当時の不完全な交通の様子を表現している」と説明するに留まり<sup>33)</sup>、遠い過去を描いた記録的風俗画のように捉えられる傾向があるように思う。もちろん、そのように見ても、横浜ゆかりの人々にとって愛着が感じられる作品であることの価値に何ら変わりがあるはずもない。何よりも開港



記念会館の洋風インテリアの中に、色とりどりの鮮やかな光を投げかける和風モチーフのステンドグラスは、そのクラシックな装飾の美しさだけで十分に眼を楽しませてくれる。しかし、横浜開港の歴史と密接に関わる物語として捉え直す時、ステンドグラスは、より一層の輝きを放つのではないだろうか。

#### vi) 本章のおわりに

以上の考察から、開港記念横浜会館を飾った壁画とステンドグラスは、それぞれが横浜の歴史を物語るナラティブなものであり、単なる記録としての風景画・風俗画を超えた、開港を記念する装飾としての意義が鮮明になったのではないかと思われる。

実際に、当時その意義がどれほどの人に理解されたのか、それらの建築装飾を見た横浜市民にどのように評価されたのかについては、手掛かりとなるような資料は見出すことができない。いみじくも黒田清輝が、洋風建築の壁画を、洋装のシャツやカラーやネクタイにたとえたように、完璧な装いの一部として必要不可欠ではあっても、横浜会館の壁画については‘洋画界の泰斗・和田画伯が手掛けた立派な装飾’といった言い回し以上の評価が、その後見られないということは、深い感動を呼んだり、長く記憶に留め置かれたりする芸術的な作品ではなかったということを端的に物語っているのだろうか。しかし、そうした芸術的価値よりも、横浜会館の壁画が、横浜市民にとって港都横浜の「勇健の意気」を示す特別な記念の意義を持つ壁画であったこと、その意義は2つの壁画の「間」をつなぐ先人の偉業に思いを馳せる人々の行為によって達成されるものであったこと、そしてその意義と価値が現在の横浜市開港記念会館の壁画にも受け継がれていることを、あらためて問い直すことができたとしたなら、本稿の意図の少なからぬ部分は達せられたことになる。

ところで、開港記念横浜会館と横浜市徽章のハママークと並んで、1909（明治42）年の開港50周年を記念してつくられたものに、森林太郎（鷗外）作詞、南能衛作曲による横浜市歌がある。以来、100年以上も歌い継がれ、広く市民に知られて親しまれているが、そのような市歌は他の都市にはほとんど例を見ないという。「わが日の本は島国よ」という有名な出だしで始まるこの歌の後半は、「むかし思えば<sup>とまや</sup>苦屋の烟、ちらりほらりと立てりし処」「今は百舟<sup>ももふねももちふね</sup>百千舟、泊る処ぞ見よや」と続く。あたかも開港記念横浜会館の壁画「開港以前の横浜村」と「大正6年の横浜市」に描かれた光景のような歌詞だが、歌の最後は「果なく栄えて行くらん御代を、飾る宝も入りくる港」と、横浜の永遠に続く繁栄を讃え祈念する言葉で結ばれる。この結びの歌詞も、横浜会館2階広間の天井画に通ずるところがある。あるいは、市歌と壁画・天井画の構想には関連があったかもしれないと思わないでもないが、今のところそれは想像の域を出るものではない。

最後に、再び【資料2】【資料3】に戻って、横浜会館広間中央の天井画〔前稿（1）fig. 16、fig. 23 上部・25・26〕の意義と図様について確認しておくと、それは「平和の意を寓せる油絵」であり、めでたい紫雲がたなびく空を背景に、種々の紅白の薔薇が美を競い、平和の象徴である白鳩が空に舞うという情景であった。平和の寓意である天井画には、横浜開港記念の慶事を寿ぐ意味とともに、もちろん1917（大正6）年の横浜の繁栄が、永遠に続くことへの祈念が込められていただろう。

しかしこの時、わずか6年後に関東一円を襲った大震災によって横浜の街が壊滅し、開港

記念横浜会館も、そして壁画・天井画も無残に破壊されてしまうとは、誰が想像できたろうか。

（続）

註

- 1) 『読売新聞』1917年7月1日、第5面。
- 2) 『横浜貿易新報』1917年7月2日、第5面。このほか開港記念横浜会館開館式に関する報道は、註1文献および以下を参照。『横浜貿易新報』1917年7月1日、第9面。同7月2日、第2面。『読売新聞』1917年7月2日、第5面。
- 3) 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵「塚本靖日記」1917（大正6）年7月1日の条。
- 4) 本稿中の「前稿（1）」は、『明星大学研究紀要【人文学部・日本文化学科】』第21号、2013年、pp.266（57）-250（73）の拙稿を参照。また、下記サイト・URLより閲覧可能。  
「明星大学が発信する研究論文～明星大学学術機関リポジトリ」人文学部・日本文化学科のコレクション）  
明星大学研究紀要 人文学部・日本文化学科（ISSN: 1344-4387）第21号 2013-03-14  
[http://repository.meisei-u.ac.jp/kiyo\\_nichibunISSN13444387-no021.html](http://repository.meisei-u.ac.jp/kiyo_nichibunISSN13444387-no021.html)
- 5) 『開港記念横浜会館図譜』清水組横浜支店、1917年、p.21に初出。財団法人文化財建造物保存技術協会編『国重要文化財 横浜市開港記念会館保存修理工事報告書』横浜市教育委員会生涯学習部文化財課、2001年、p.71に再録されており、近年、横浜市開港記念会館でも一般の来館者向けに参考資料として供されている。
- 6) 註5『開港記念横浜会館図譜』所収の写真「二階広間〈其二〉」（p.23）の上部にも、僅かに天井画の一部が写っている。
- 7) 『横浜貿易新報』1917年3月7日、第7面。前稿（1）、p.255（68）も参照。
- 8) 『横浜貿易新報』1917年6月30日、第7面。前稿（1）、p.253（70）も参照。
- 9) 『横浜貿易新報』1917年7月2日、第5面。
- 10) 『横浜市開港記念会館』横浜市開港記念会館発行、1981年、p.4。
- 11) この横浜を撮影した現存最古とされる写真は2008（平成20）年に横浜市内の企業からの寄付金によって横浜市が購入し、横浜開港資料館に所蔵されている。P.J. ロシエは、1929年スイス生まれ、イギリス総領事オールロックとともに来日、開港直後に神奈川宿や横浜町で撮影に従事するなど、プロカメラマンとしては最初に横浜で活躍した人物とされる。『港都横浜の誕生—新発見資料に見る近代化の原点—』展カタログ、横浜開港資料館、2010年、pp.5-6にその写真が掲載されており、論考に際しては、『下岡蓮杖開業150周年記念 フォトスタジオの聖地・横浜-1860's~1960's』展（横浜開港資料館、2012年2月1日～4月15日）展示資料も参照した。
- 12) 『横浜貿易新報』1917年3月7日、第7面。前稿（1）、p.256（67）も参照。  
田澤武兵衛は、1849（嘉永2）年横浜村生まれ、県会議員・市会議員などの要職を歴任、横浜回漕会社の社長をつとめ、横浜市の公共事業に尽力した。『横浜近代史辞典（改題横浜社会辞彙）』湘南堂書店、1986年（原本発行1918年）、p.597を参照。
- 13) 『横浜貿易新報』1917年3月15日、第7面。
- 14) 『五姓田のすべて—近代絵画への架け橋—』展カタログ、神奈川県立博物館、2008年、pp.204,243。  
同カタログには、神奈川県立歴史博物館所蔵「五姓田義松旧蔵作品群」37点の図版が掲載されており、そのうち「明治六年」の年記がある「従横浜神奈川遠望」（図版番号73-32）は、p.205に掲載。
- 15) 『読売新聞』1909年6月27日、第3面。
- 16) 横浜商業会議所編『横浜開港記念史料展覧会列品目録』横浜商業会議所、1909年。
- 17) 『読売新聞』1909年8月24日、第2面。
- 18) 『横浜貿易新報』1917年6月30日、第7面。『同』1917年7月1日、第9面。ほか
- 19) 『横浜貿易新報』1917年3月7日、第7面。前稿（1）、p.256（67）を参照。
- 20) 『横浜貿易新報』1917年7月1日、第11面。
- 21) 発行順に以下の通り。  
①「開港記念横浜会館」『建築雑誌』第367号、1917年7月、pp.79（581）-81（583）。  
②「巻末付図説明 開港記念横浜会館建築工事説明書」『建築雑誌』第369号、1917年9月、pp.50（704）-52（706）。巻末付図として会館内外の写真、平面図、正面図、側面図等所収。  
③「開港記念横浜会館建築工事説明書」『開港記念横浜会館図譜』清水組横浜支店、1917年11月。
- 22) 有田四郎の壁画下図制作に関しては、前稿（1）pp.257（66）-256（67）を参照。

- 23) 前稿(1)、p.258(65)を参照。
- 24) 中央停車場の壁画に関しては、和田英作の談話記事「竣工したる中央停車場の壁画」『美術新報』第13巻第11号、1914年9月、pp.28-32を参照。
- 25) 黒田清輝「建築物と壁画」『建築工芸叢誌』第2期第10冊、1914年12月、pp.1-2。記事には「大正三年十一月談」と記されている。
- 26) 和田英作「壁面装飾」『中央美術』1916年5月、p.111。
- 27) 前掲註21、①文献、p.79(581)。
- 28) 『横浜貿易新報』1913年9月24日、第2面。
- 29) 『横浜貿易新報』1917年7月2日、第2面の「開港記念横浜会館開館式」記事、「大隈候祝辞」を参照。
- 30) 侯爵大隈重信「横浜の回顧と其将来」『横浜貿易新報』1917年1月1日、第5面。
- 31) 前掲註21、③文献に同じ。
- 32) 石井孝『増訂 港都横浜の誕生』有隣堂、1988年、p.53
- 33) 例えば、『甦る光 横浜市開港記念会館ステンドグラス修復記念誌』横浜市市民活力推進局地域施設課／横浜市中区役所、2010年、p.8、など。

#### 図版出典

- fig.19-24 『開港記念横浜会館図譜』清水組横浜支店、1917年、横浜市中央図書館所蔵
- fig.27-29 横浜都市発展記念館提供
- fig.30 『横浜市開港記念会館』横浜市開港記念会館発行、1981年
- fig.35-40 筆者撮影

#### 附記

調査および資料掲載に関してご高配いただいた工学院大学教授藤森照信先生、同研究室の小渡尚恵氏、東京大学教授藤井恵介先生、東京大学准教授加藤耕一先生、横浜都市発展記念館調査研究員・吉崎雅規氏、同調査研究員岡田直氏、横浜市中央図書館関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

\*本稿中の引用文は、仮名の一部を適宜現代仮名遣いに改め、漢字は適宜通行の字体に改めた。また、読みやすさを考慮し、適宜句読点あるいはスペースを補った。引用文中、難読箇所等には原文のルビを適宜残し、筆者が補ったルビや註は〔 〕で表した。